

(社) 東洋音楽学会 東日本支部第 137 回定例研究会 発表要旨

薩摩琵琶・錦心流のレパートリーとその変遷

曾村みずき (東日本支部)

薩摩琵琶の一流派である錦心流は、永田錦心(1885～1927)により明治末期に創始された。明治後期から昭和初期にかけての薩摩琵琶の全国的な普及には、錦心流の人気の大きき影響している。本発表は、錦心流のレパートリーに注目して、流派創始に伴う琵琶歌新作の実態およびレパートリーの変遷を明らかにすることを目的とする。

薩摩琵琶のレパートリーについては、島津正(2000、2001)が明治時代までに刊行された琵琶歌本を網羅的に調査し、薩摩琵琶歌集としてまとめた。しかし、錦心流にかんしては、琵琶歌本を対象とした具体的なレパートリーの調査は未だ取り組まれていない。本研究ではまず、『薩調四絃愛吟集』を中心とした錦心流の琵琶歌本を調査し、レパートリーの全容を把握する。そのうえで、永田錦心による楽曲解説・演奏指南を含む『愛吟琵琶歌之研究』等の資料を参照しながら、題材や楽曲構成等の観点から楽曲の分類を試みる。なお『薩調四絃愛吟集』は、版によって収録内容が異なる場合もあるため、複数の所蔵機関(国立国会図書館、東京文化財研究所他)を調査し、レパートリーの変遷の過程を詳らかにする。また、これらの琵琶歌本資料の他、琵琶愛好家向けの月刊誌『琵琶新聞』および錦心流一水会の機関誌『水声』等の雑誌資料も対象とし、歌本未収録の琵琶歌を含む、錦心流における新作状況についても言及する。

錦心流では、高松春月や飯田胡春といった作詞者により琵琶歌が新作された(高松《別れの盃》、飯田《龍の口》等)。その一方で、錦心流成立以前より薩摩琵琶で演奏されていた、吉水錦翁(経和)や小田錦蛙らによる作もレパートリーに含まれ、その中には錦心流の代表曲といえるものものある(吉水《川中島》、小田《本能寺》等)。こうした点をふまえ、本発表では錦心流とほぼ同時期に発展した筑前琵琶も含めた、先行流派との関係性にも着目し、レパートリーの観点から錦心流が人気を博していった背景を探る。